

# 柳が崎ヨットハーバー存続を

## 県セーリング連盟 あす知事に要望 競技普及の拠点

NPO法人「県セーリング連盟」(山田将人会長)は22日、県行政経営改革委員会(委員長＝大道良夫・滋賀銀行頭取)が売却・廃止を提言した県立柳が崎ヨットハーバー(大津市)の存続を求める要望書を嘉田知事に提出する。ハーバーは全国規模の大会に利用されているほか、世界で活躍する選手を数多く輩出しており、連盟は「ヨット競技普及の拠点を奪わないでほしい」と訴えている。

県によると、ハーバーは1962年の湖岸埋め立て工事に伴う民間ヨット艇庫の移転補償として、63年に設置。施設の老朽化で96年に再整備された。湖に面した敷地8369平方メートルに艇庫、棧橋、駐車場を備え、2006年度からは連盟と県体育協会が指定管理者として年300万円で運営委託を受けている。年間の利用者数は約9000人。

委員会は「利用者の大半が特定団体で、民間への売却を検討するべきだ」とし、売却が不調に終わった場合、指定管理期間終了後の10年度に廃止するよう提言している。

これに対し、山田会長は「試乗会やヨット教室も開いており、使用者は特定ではない。経営面のみ分析ではなく、スポーツや文化

の振興といった教育の視点で考えてほしい」と反論する。全日本選手権や全国大學生選手権の会場にも利用されており、売却・廃止されれば、これらの大会は開催できなくなるという。

また、県内には民間のヨットハーバーもあるが、いずれも大型クルーザーやバスポート用で、ヨットのような小型艇用の艇庫や棧橋はなく、クラブ活動で週4回、生徒が練習する県立膳所高ヨット部顧問の山下員徳教諭は、代替施設はなく、廃部にするしかないだろう」と心配する。

ハーバーでは、北京五輪で7位に入賞した松永鉄也さんや、世界最高峰ヨットレース・アメリカズカップに出場した兵藤和行さんらも練習した。小学2年から腕を磨いた松永さんは「今

の自分があるのは、柳が崎場をなくさないでほしい」のおかげ。後輩たちの練習と話している。

2009年(平成21年)10月21日(水曜日)